

開國起原

特
リ付 5
2110
16



2110
16



閩國起原卷十五

沿海測量之請願

亞墨利加人分差出於書面之儀三付中上以書付

伊澤美作守

都筑駿河守

井上新右衛門

留濤上渡來路一在亞墨利加船之像下因事初支配

組織差在由勘定方由目付方吟味方船中は越一
 体之事柄得与為承継之要事意之趣志一昨廿八
 日中上を通言何事の事柄に面會之上書面呈出可
 中之付急速江戸表に差立吳多振中立の旨右に
 政府の書翰に事部又事船主分の書面を多事部
 限事身之處船主分の書面を好政府の事部
 限の命を請居留港に案りて議付全政府分の
 書面同振有之に間是事幸初に事に呈出意に
 付早速面會致し案旨強中立の旨得共差急の儀
 事の事係も有之儀に付只今右邊の振程に中談に

海舟書屋

要書面を封呈出に付議に既歸りて旨支配組織
 中の旨並に内沙汰の趣も有之旨開封之上和解為
 仕之要中上之趣も不容易筋に有之尤前文面會
 儀中立の趣も有之旨明言私共面會之上尚一辨
 振程も凡是事之上一回得与評議仕由下知可事伺
 を得て不取敢様文字和解との旨上中旨之趣川路
 左様の耐水型筑後島岩瀬修理に由中談以由中
 上矣以上

四月朔日 (安政二卯年)

曆数千八百五十五年五月十四日

五墨利加ウ井ンセンス 号 下田 於

貴君

交易渡航の場所を有るを暗礁并寫し等を測量
 之爲ニヶ年前北アメリカ合衆國の五艘之船を仕
 出さし儀を日本政府に於て内儀書に於て考
 今我等日本に來り當時南太平洋に有るを我
 領地と唐に於て聞て於て交易専ら盛也依
 我西に航し去るに於て日本海を通行せ

海舟書屋

されハ不右叶儀地圖を以て知る處一 右海路中
 有る難所を量り地處を預きされハ交易安全と
 云難一 我國之交易亦日本島々之周圍に於る難
 所之害を交易に及ぶ其難所を秘さるる好親
 君に於て預ふ所ある半若我渡航之もの共難不
 不案内の時を破船多く其害に及ぶ死傷もの多
 將之商人と余儀日本人の賓客に取扱を更へ
 之をり其失費多うる處
 前条に次其の如く渡航之通路測量を日本人の
 且我等之爲に於て亦其の如く然あり右測量

日本人主信いし一層アメリカ合衆国との條約中其
十ヶ条に我國の船隻を運ぶ時日本港に系
入るる許容あり

萬民悉く條約を解議する時規定と違ふ一二
之事件免許可きは是より屬する處に都て許さ
所とすし一然らざれば其許容全うなくとも一
親しき承る船沈没燈失撞と失ひ或ハ系組
りの饑渴及ふ時之當り近郊の港より可系を免
し彼等港の形勢を秘するを信義より以て虚偽に近
條約に表を相違分咽と解得るる処より前文預

海舟書屋

儀を既に日本人に於て許容有る事一ハ假令
條約中に古くは廉を以てし由至互に懇切に
一扶助すし其日暗礁等秘一置交易に障且大
國民人許多し命も拘るを日本人に於て預ふ
一其あるまじくは存る若難所且避へし道
路を希知するを拒む村ハ交易の障且許多し
人命も拘るを預ふ道理あり
學問を為我等々測量ハ日本人に障に害なく
我等に於てハ最肝要之事あり 歐羅巴并合
英國の政府ハ其港を圖面より載せ板に興一是也

外國より高し也是決り害ある事なく却て便利
多く渡航しよりの扶助之為漸ある事なく渡航
を建て且岩難く岩を燈を居く是を日當とて是
則仁心と政道と為る事也

軍船を地圖ありとも其海路を知り也其故は船
は大砲を備へ先より立て難所を探り航中より
火の手便多通路を遠く航日する也軍船敵
國の港を測量するも平日常暗夜を良とて商船
は於ては左なくして地圖を便りとも其助は渡航
我謹んで致し日本政府日本海測量を許容せん

海舟書屋

事と我前文中に之を外志望と云々若日本政府日
本人を善き事と云々を希ひ彼人兩人船中を招待す
る事何れも大其の事也且其人我の業を許さる
て是を學の益を得る也

我預望の止を得ざる事情條約の趣意和親の中
旨且公然と許しよる通路の難所を測量するも人々
免怒をよめる事自然の道理不基き事明らう
ある也稀に渡航するも遠隔の事海路を平
常測量するも同義無余儀事とも何れも
船に其海路を迷ひ漂流するも安全なる事あり

日本の驚く我航海に害障を及ぼし且危難あり
後を初ては測量の事を希ふ也測量交易の
先きんまゝの於録せし最當の規則に違ふ
日本政府の命知まざる所あり

我欲しと意許容あるべきに相違あるものごとく存
在若許容なき所の命を必し。プレシテントに於て日
本政府の好意あると思はざる事顯然あり我も
高貴の人々談おし為下田に渡来せし我等條約
中許容の處を土地の重なる人の談しりし我等
之行状正しく恭敬也望まざる人の障或なきを
海舟書屋

仲人ある時と條約第四條を違背するもの事
日本帝英合衆國。プレシテントの敵とす
古敬テヤ上

南太平洋海北方に於て
合衆國測量船の王

シヨンロツテイル

日本國執権に

三米利加船主應接仕儀の上書付

伊沢美作

韶筑駿河

井上勤右衛門

一昨朝り中上を以て古渡来ると思ふ利加船之船主ジヨ
 ンロツテイル昨日返古用所ハ唯客私共并支配向至
 外吟味方由勘定方内目付方一面面合仕之案彼亦政
 府方之命之依之諸不測量之為難越之由且過百江
 戸表ハ中上之像凡幾日程在立所沙汰可有之部
 業知は慶吉中出之官預筋所字漏之有之不拘政
 府内評議之次第由之且日限治定之候ハ難相分候
 中入之処左之ハカムサツカ迄ハカレホニヤ及ハ支那ホ

海舟書屋

ハ其越凡五ヶ月ハ相立候後再渡仕之候事ハ可仕候
 附テカカムサツカハ其越之付蒸氣船之艘ハ田表ハ
 其差無人ト云々其意不致ハ其旨無人ト云々其旨
 且其同和港内之器面右装ハ中上之旨中上之旨
 西之人之像之云々其意不致ハ其旨無人ト云々其旨
 且余儀彼地ハ其意不致ハ其旨無人ト云々其旨
 所々之旨之旨條約外之場ハ容易無難ハ儀難相
 其旨中上之旨之旨私共ハ其旨中上之旨中上之旨
 且若館ハ船之旨之旨其旨所之役人ハ其旨中上之旨
 其旨中上之旨之旨遠隔之儀是又難承届候及挨拶

此處當港內之測量係在古中...
其在外尚港內濤中岸上陸路等之儀中...
夫之及答中北止此項分抄時...
五人共之儀之付出面差出處古中...
此處之當方之可有掛合...
出之書面之抄抄錄...
又日本海測量之儀之不容易筋柄...
議之...
之急速...
越再渡來可致古中達一下先當港出帆...

海舟書屋

可任者之熱川路左衛門尉...
右添以候奉伺...
存候以上

四月三日

外四月二日於飯田所用五人...
古都筑波河等井上新古島...
伊佐新次郎...
由勘定田中庄次郎同捨由後目付平山謙次郎...
後目付中書信次郎...
出張由警掃人教

大久保加賀守家来兵出立半時過五人コモドール
館ジヨロツテール外士官拾七人下官五拾二人
上陸應接之題 左之通

義作也

初子面會いしに在當不幸初仔沃兵代書有之

口ツテール

今日拜顔仕大其幸存也 且墨利加政府之命
之依之諸方航海以命之取當所之兵出也

駿河守

久々航海無難之由疲勞之事 存之今般當方也

海舟書屋

初者越面會いしに大其幸存也

五人スナウウエンス

初子持顔仕大其幸存也

新右衛門

古回断

口ツテール

答回断

暫時休息可致一回はも可然可也 通當港滞留中
之為守之心能可也 中 茶菓子等之送ル方之食

口ツテール

難有奇存之只今合事以命

同人

乍去暫時休息可也我休息中

五人

難有奇存之

一同退在茶菓子差出

新次郎

此程船中可好越更コモトールと有接換如何可
有之哉与幸行と待居る子取更引取之尤未
暫之滞留可也致生と存之留其内蒸菓子掛

海舟書屋

一見事了れ新次郎

又十ウウエ

店入来可也下序待中居る

謙次郎

魯西兵と都以格と戦争勝敗之如何都

口ツテール

互に勝敗有之

右有玉理非しと事と有之哉

双方に理合有之

西兵共四國有之英佛等も同様と和親之必柄

二可^レ之^レ然^レを英佛とも都見格に加勢い^レ一^レを
茲^レ如何^レの^レ事^レ也

英佛とも都見格に方理合に存^レ在^レ加勢い^レ一^レを
二可有^レ之^レ双方に理合に^レ事^レ也
加勢い^レ一^レを者有^レ之^レ事^レ也

再席
英作

皆所も其見^レを通邊鄙に雲水災^レ事^レ也
不中不自^レ中^レ事^レ也

口ツテール

玉極結構に土地柄と事^レ也

海舟書屋

同人

其許^レを久^レ航海^レ事^レ也

同人

是よりカムシヤツカ氷海道に事^レ也

同人

此程に事^レ出^レる^レ事^レ也

難^レ事^レ也

同人

從^レ江^レ事^レ也
往^レ返^レ事^レ也
折^レ損^レ事^レ也

同人

方より返事一より取ると云く返事も仕通さる一
先退帆仕返り終越る様可仕也

同人

再度返事何方航海致さる事都
カムニヤツカ氷海道カカルホルニヤコ内サコフラシ
スコ止終越まよりサコハイ昔は由終越中
何返事返り手取分可申也

同人

三許り皆不に再渡り一に返合を幾日種お然る事

海舟書屋

同人

五月種もお然り事一に返り氷海の間塞之致さる事
此方其考も何分急速評決も返事到来い
此義も余り通る事存る一端出帆も致さる事存る

同人

戸田より返事取人兼に懇意に
船も是も長間致意も存る如何可有る事

同人

右より下田船館を取極る條約有る事取彼地
と寄せも條も終る事存る

同人

友を以て魯人を當方へ呼寄るは秋を急る者哉

同人

魯人呼寄るは儀を義知しては好むに思ふに使節も君不
て然るより居合はれ如何に舟を以て用毎に在成り候哉

酒食等出さ

同人

いつれも魯人の面談致す魯人より戸田表へ書し梅を
引寄るは自分杯も右邊へ書しゆく字取中候事好む
魯人同知の書製戸田表各候も由存知之由存候哉

海舟書屋

同人

久し滞留船造より一君より取多く圖取もいこ一筆に掛
て後人の速くは留り候事不存候

同人

戸田の書と魯人の梅を引寄るは存候私共も當方候

同人

夫れ魯人を當方へ呼寄るは儀を義知しては好むに思ふに
何事にも戸田の書製魯人の地圖を梅を引寄るは
私共も同知の書製戸田の書製

右魯人を戸田の呼寄る書製中候事解し送

舟中述事

九七二

其許子江戸表に中流を過ぎるに河津もさうして
 取寄りて江戸に近づくと其の山勢其の雄姿
 道り上りて面を江戸表に中流に儀只今江戸に
 下田若館を湊へ外に漂流甚きところ船の拍難
 せ取極るに田に熱き水難くゆを保魯人と
 其の熱意より在は水面を其の故に存意を以
 魯人を此れ地に呼ぶ可き也

魯人は此れ魯の思ふに難有らるるを得る可成り其の意
 を彼地の長は是れ中流に如く此の海可有也
 魯人は江戸に在りて難有らるるに其の意の如く魯人の
 処に魯人達も此の意を得る可成り其の意の如く魯人の
 魯人の久しに留る可成り其の意を得る可成り其の意
 を其の意の如く魯人の意を得る可成り其の意を得る
 魯人は其の意を得る可成り其の意を得る可成り其の意
 其の意を得る可成り其の意を得る可成り其の意を得る
 其の意を得る可成り其の意を得る可成り其の意を得る
 其の意を得る可成り其の意を得る可成り其の意を得る
 其の意を得る可成り其の意を得る可成り其の意を得る

越後に付魯人の船子に彼地と相通し中は何卒
魯人の面を以てし一處を此の港内を測量仕度
此儀を如何可有之部

當港内丈の儀を測量仕度候に付届可申
箱館に於越後カカムシヤツカに於て
魯人の邊中一處に於

如所振申之候に付戸田表を此儀に
之に且條約外に於て是等難字海
戸田表に於て是等難字海
其の由奉行候に由預申可也

海舟書屋

一日船中の儀申下候に

萬事申入に通當此儀候に付種々取込仕度
も急ぎに越後品に於て是等難字海
此後渡來に於て是等難字海
此條約書に之を以てし陸に於て是等難字海
日別候に於て是等難字海

水災にて万事は候に於て是等難字海
此等難字海并柿崎材に内及に福浦との三
ヶ所にて是等難字海
福浦に於て是等難字海

彼理當港之濠抗建船多あり一若き如何に成る哉
是も水災多に相換一尤破之取上置以節可成建上存
居之に於濠形等以前より変り支是取調中なる
何是也程後之建可中なる

何分宜き預也

是のカムシヤツカに余り留置其若船表に少船を設
お寄私共を在る通り過を積りて也

第船迄可成其日本に由後人々人居系組を
多下り後也

海舟書屋

遠隔の場不殊之奉行之支能和子も其等旁に難少なる

玉泉寺之所在一人共之軍下付書面を以中上之原に
兼古以多一也

何是士官のものに為持可也上之
今日之種之由馳之頂戴難多存能

奉行始一月退之在

船將

硝子袋之燈籠を對オルコル一個仔細美作也
換に硝子袋燈籠を對都筑疏に河を根に差
上之原を留置中上之原に下之

新次郎

委細事於此可中立暫附在待可也
同人

其許分送差出之書面政府之望立未之由沙法也
其之由前節之許分之贈物之納致其儀在成
其之由厚意之候之承存之其在漸在昔幸切
其之由之付路候中入在

明年使節彼理分由役之品之望上由之納在
其之由業當仕之友之好之私分差上之由物受
納之由之可致其分存也

彼理之贈物幸切始之受納致其之掛合于一應在

海舟書屋

漸之上之儀分其許中其之儀之未之何共不相
定之由當節之受納分中其之何分難在成也
委細仰之趣承當也
右早分五人共一回引之鼻差等之系船路之事

四月五日

無船コモトール分望出之書面和解

手覽書讀之其意味今得也其在江戸表之上之書箱

中其日本海邊測量之許を預ふ我軍之船危難
 之虞を日本港へ渡来し儀日本政府に於て許容あ
 るとハ不存存是則其港へ有所を知らしむるを忌
 嫌する之係一若し政羅巴洲并合瓦玉の法則を
 以論まれば公正と云難く且慈親せ云々一
 一若日本人或る人其食物を与ふ魚を其食物へ有所を
 知らざるを正と云ふ魚を其好親とせざる也
 一何方の港のありを知らしむる港へ入るる難し尚又
 人とて食物を得るれば喰ふ事能はる
 一此事を論せしむる知事所之且其書を書翰に日本

政府何れも存意し可き其業を殊に意を以て
 一 慈意を以て結ひしむる日本人の外能く其意ある事
 く其米利加人其於てハ日本に對し深切に慈意を以て其
 米利加物著述の書中其左に意味を記し可
 日本人と思ふ其慈意を以て隔心の患なく不快の事
 あらざる慈切を破る事なくして亦旅客扶助を乞
 ふ財を心力を尽す事あり
 我昔子ヨ一工 人名並に其業を以て皆知して是を一
 不詳
 体の倒則ともあらず其のいと感伏せり
 一當時魚の西の人窮迫す及び其の西の帝を以て我大統

領の好友也我大統領も又魯西の皇帝の好友也
亦至親且懇切之至善利人日本へ海軍政
日軍人魯西の國或は其邊海に於て破船をお
ひし時と其所へ赴き安否を問ひ日軍人の
勅諭を告ぐる

一 今為る條約の事論まゝは專用の事と是を
江戸表に於て西軍あるべき事あり條約中の懇親
の法則とまゝとも我是を論まゝ也

一 至善利加提督於てハ其權を以て欲まゝの測
量許容をとふ併下田の事行も於ては是を許

海舟書屋

さきの權ある歟又日本帝國中外邦を許さ
の權ある歟至善利加提督於ては魯西人と
の懇親の事とを強て論まゝ也

一 兩國懇親を結ぶ強固切も是也

一 日本政府が如何に強意可有に其を措く様も知
さるる許容をさるるべき事とありや是を甚むる

して港へ下田港 船は海軍に形状を以て測量せり

一 廣大なる政府にして其意業船彼港へ赴く事
暫時の事也且ハソコウ船の赴くと是れ其の事
永く論まゝに事とあり

一、三、コ、ク、船、戸、田、表、に、起、き、島、西、上、人、に、面、會、し、上、同、人、共、連、歸、し、儀、に、談、判、の、上、儀、引、可、致、在、

卯、口、月、十、四、日、大、和、守、右、達、

覺

西、善、利、加、船、分、中、立、に、日、本、海、測、量、に、儀、自、評、議、以、自、以、一、等、中、等、の、越、し、有、る、に、先、別、紙、に、通、右、達、在、

海舟書屋

一、自、今、之、時、後、濟、事、に、取、計、振、務、又、篤、と、評、議、以、自、一、路、に、又、込、り、越、し、各、應、務、中、練、り、可、致、中、以、自、事、

下、田、幸、右、始、に

右、達、に、越、

西、善、利、加、船、分、中、立、に、日、本、海、測、量、に、儀、自、評、議、以、自、以、一、等、中、等、の、越、し、有、る、に、先、別、紙、に、通、右、達、在、
一、自、今、之、時、後、濟、事、に、取、計、振、務、又、篤、と、評、議、以、自、一、路、に、又、込、り、越、し、各、應、務、中、練、り、可、致、中、以、自、事、
不、否、其、儀、に、寄、り、濟、事、に、自、自、の、測、量、に、儀、に、從、來、
所、國、内、に、若、し、自、制、其、儀、に、儀、に、自、容、易、に、自、國、に、難、若、
其、初、に、際、限、に、自、自、の、取、五、十、月、に、過、し、迎、換、授、

有之誤也五ノ魚ノ旨味ノ及諸福以保能ノ為
年ノ松可也取計ノ事

但無量利加船戸因ノ者相也ノ候之決ノ難也成
其旨ノ事也之可也取計ノ事

下田幸村

三量利加船戸測量ノ儀也然レ之通也達也工付也
之當也川路左也ノ厨水野也此後也岩瀬修理也
地ノ所也也之在也諸事也依也諸事也所也也

海舟書屋

可也計也也相達也也旨也也也也也也也也也也也
可也通也也相達也也事

無量利加船戸中ノ事也日本海測量ノ儀也自評議ノ
大ノ中ノ事也也也也也也也也也也也也也也也也也
之付也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
一ノ條也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
取也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
考也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也
元也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

端々不容易像をもお舎死直を遂件指摘
 伝へては既に内明察を為すを以て通るに
 測量の可き處を濠洲并海岸船附の場所
 必上陸止處を仕上人を誑し種々奸計を施し
 可申す内を狡猾に土人共却て彼を奸を助け
 る振る不業も右偏内外を應じ遂に彼等素願
 之通忽華兵混濁を成るを以て通るに締むる中
 百番船を詰り内を敷き場を多し得るに益を得る中
 成るものも不少なり付万一圍國沿岸を不及中一外河
 内河迄も通る測量等仕人振るる最早

海舟書屋

序威光も失果巨藩の内如何振る不利を志す輩
 可もとも難計左を以て土崩瓦解の勢を恐る挽回に
 之万々急ぎ来と只管痛心仕る官此處を儼と先の大
 小名に面して前以て振振等巨細に演達して上級に可否
 之評論を極意中上を振る仕達人等向背甚しき見
 定る上内經画を為すにあり外を以て官を為すも其
 事なき却て瞬時の内を何振る事とて可なり
 事款是近き無任據は場命も有る外國に條約書
 其外國は振振等通るに取不るも不れ其を以て遂に
 條約書書世上傳播仕詰り満る面は於ては内實

之心得存之者付表向由海... 後言者亦不少詰り近々西洋諸國之形勢... 之由多と端を指し儀を決するに... 之由裁取亦細を重し... 其の善き却る由不体裁之慮... 典廢存亡興り儀を由る限り... 其天下公共の大義... 存る附する大小名... 於て魯墨英三國... 之教儀に付中... 海舟書屋

海舟書屋

此星の界下回運留... 書面額... 一由演説... 併用... 人... 其... 之... 之... 一時... 之... 其... 之... 其... 其...

所國內尾解之患を防ぎては一端も可らず却て
 又巨船測量之儀を今般中三之趣を不能條約
 文修を押す事強き事取逐一論破可任見括も各
 之旨別候之由扱多き事半多き被容易之儀伏
 之任り各一併是迄之由扱振一應之由論有之由
 とも元之舌頭多き事是之強論を括之迄之儀有
 遂之強を押す事強之始末之隔り益之扱振之始
 終之見透一層之儀我慢之事とも中出何振
 之儀中出之由扱強之申張之由外出之由是方
 之儀之強を括之由扱強之申張之由外出之由是方
 之儀之強を括之由扱強之申張之由外出之由是方

海舟書屋

又此處の只之尋常之由扱振之儀を以て昔年彼
 割地奉貢等之儀を可申上之必要有之由大逆之
 此方大船出末航海蓋ん之由扱強之申張之由外出之由是方
 岸之測量之由扱強之申張之由外出之由是方
 其許容之由扱強之申張之由外出之由是方
 其之由扱強之申張之由外出之由是方
 海術之由扱強之申張之由外出之由是方
 此之由扱強之申張之由外出之由是方
 大船之由扱強之申張之由外出之由是方
 其之由扱強之申張之由外出之由是方

循倫安之風增長可仕儀之付何しるも五月後
濟東之節を一應

所國法難お成候中達彼義引不致りて無之彼
理と談お之趣も有之る有政事の中國政府に使
价を奉一巨細之儀を政府に可及惣令旨中政出
談お漏近も有無ともお扣之振中達を深達之由
注文之軍艦由手に入不申之に諸共滿之内之製造出
来之しる軍艦由手出右船口可然もの共為系組
彼國之船を先導と之る事は彼國政府に及至
合萬と説得仕りて談おお申之の事あり候約

海舟書屋

面を改竄いしる儀を出来仕りとも文意を發揮
と致さる候に双方之心取違ひも可申候事あり附
録書面等より此處取定ぬ事候も出来可仕候
万一談おお整ふ中近も往復之外儀論を托
三四年之期を延し之れに儀を出来可仕る内之
内手答もお整可申事候取回套を有候被者共
之意外之由を由探有之るに意外儀報も仕
事又是非共急速測量不仕る事難計杯種
之言葉を托し之に彼由之船より沿岸測量い
しる事あり方之封建之國柄を領主より法度も

有之政府命令不切届内意外之爭端お起り亦必熱
萬之交の自是空を結果可申との意を趣を
押之るに誤得仕

序圖多淺深測量といふ序を以て人の内測量學
心切りの四五輩限る系組

本文測量の儀 序圖地有是の船と云ふ急速

測量お出来仕り後より付若當材迄の序記

の意氣氣持越不中なる例年之商舶業人

の内注文を兼ね同國の意氣氣船を買上り成るとも

又其互墨利加人共は至今の都令も亦同く其意

海舟書屋

第10頁上段第3行の可有之儀と書き得る

此方の考之舟人教業此の儀為心切の執り為仕り強

序圖稱を損へる程の儀も之より後部を先づ右

使价の是を又も 序圖地を測量といふ儀を右

の款右の如くは取計の是を以て 序圖地を勿論万

國の是を對するに以て後述の如くは都合ハ為し宜不可

多し部之付有るに順に取計を以て如何可有之儀の儀

大小の石に古墨を粘り又外良策中より向より之を以て

從又之に財を以て是を取捨し可有之儀は最初より只大

小の是は是迄一通の紅を以て是を以て自然當令の場

合前後回顧仕路十分存言を由り申出振る
其力可有之如有一脚之由見込る簡報之
之趣由演進之上一夜大中各存案を以有之由
仕度儀と事柄を私共一統評議仕由流之由書面
款右添返達此後中以上

四月

大目付

内目付

別冊評議前一条米米利堅濠洲彼理之面談杯之

海舟書屋

迎の書言好の事まーくりや外は是を迎使价專對
之人物是定と華蓋頭もも兼内大統領之面談
右條より之事此時方之接應又一層之紛冗下取
條一条之改訂船事西人を台連沿海測量之由不
容易好まか之れ共實之不好之業之出今
一条右添右測量之儀ハ若國航海之風習之由
停泊之場不淺礁石之儀素より當然之儀之由
之様中可各之由日本鎖國之風俗年來深漬
之封建之國柄之揚所之心漫可有之由之由一
矣今不切之由之意外之由端右并右角之由之由

港親睦々交も空船相集りていふ所の残意あり
 軍あり右測量儀を當る所其路を思止り退り
 甘節も可なり大船出米時方より豆船入港時迄は測量おと回すこと標と申すこと
 道も路切いし一憤然として出帆時方へ敵もあし強し
 沿海測量いしはもと此層強暴に行ひ有るも中
 されうく素より沿海二里三里外航切或は沿岸小舟
 系如く上あり先を修む右漸可申す或は云何れも
 沿海侯伯も其通るは演達有るは儀を評議通し通
 可敷為る右測量船根は港内へ系込不法を妨り
 其先方より曲事此方より違ふ所を要押し系込殊

海舟書屋

又不法いしは十分彼方より不直な儀来何れも
 諒お可申す然右等し見据を何共一定いしは
 其は今一系し拙策も心を盡しは違ふ有るは
 我評議面しては通し口舌を以無しはは官據
 意外に出る方可然し前後二第しは採柄と申し
 事は和見しは尚由賢考明後り迄館迄加筆を預
 墨利節の系りも儀を修む意外に出るも於中
 其儀を随分可然し其共實しありは事しは右系
 和人共し有るは和者し人物も其は年頗り

録共是之當其諸家内役人 其日亦達有之可然之
存之事

右中言論多及之其子之其産之其愚意不中 亦如何
其字蛇足之陋見其認法其談中其事

安政二乙卯年八月大和号右海

阿蘭陀之儀ハ勿論魯西之墨利加二國之長崎下
田若館之港ハ濠洲之英吉利之長崎第館之
二港ハ濠洲之英吉利之長崎之近
清國之交易盛之其來序國之海上繁之通航之

海舟書屋

一之付之暗黙其心得不中其之人命之拘り之河浦
之測量路之卷之皆三月中下旬之濠洲之アメリカ船
より預出退之挨拶其より其為ハ濠洲可航中其立出
帆致之右測量之儀容易之其許容難其成之其退之
濠洲之節下田之於中其論嚴密其斷之其成其又其
何孫其論其之其義伏其孫其退之其方より應接
之若彼國之其之向政府之可存懸念之其之其論
其其併國風制者其達之上論談徹底難致
其情之其下田之其應接之挨拶其其内海迄之其
入其款如何其之其其之其計其其之都之

徳便に取扱に取成居儀に付今般迎も此方にて
ハ徳に取扱に積るは自然に依出来も難計
其旨秘に為るに心得る可き存在依る互墨利
加船より差出に測量に儀中に書面和解為
心得相違之事

互墨利知官更對話書に取成存中上書付

井上信濃守

密田備後守

互墨利知官更為書に取成存中上書付

海舟書屋

此の書可具方度の中は初答も趣も其
上應接都合も其座に留るに底得確踏勘書不
向并官更宿等にも支配向るもの等も其
見廻して私共并支配組織外由使目付等一同
孫越官更に及面會彼等對話に應る取調等冊
以上中允其情難測に於測量に依り上被國
政府に命を請るも官更引交り不都合不取成
取可其計中時其に依令者一条中出るに再應
右約に置る儀に付何れも及應接由國害不相成
採可其計中存依る對話書に冊に添紙候中上心止

辰十月六日

九八八

對話書

休後

諸州に於て外人輻湊し港に都多砲臺有るは甚

官吏

諸國より外人輻湊し地砲臺多し預りしを
とるは亦砲臺を敢て敵國戦争に爲るは
賊等大砲を乘込し地を真家に押入貸賦奪取
儀も間々有るは備へるに於て其の設けし

海舟書屋

何を以て防可申す

休後

下田にも砲臺を築き積るべき

官吏

當地にも砲臺を築き積るべき
江戸大坂浦賀等にも十分の備可然るは

休後

昨年濠洲にコモドールを如何に

官吏

用人事に達し西倉不路の府安否に程心は

備後守

コモドール中を測量し儀を容易あらざる筋に
付甚心配なす

官吏

同人等當分再渡し儀難計大同人等又を外コモド
ール渡来以前より私に取扱に有るは

信濃守
備後守

右一条を我國全所に係り事何れに申すも
之れも挨拶おひかしく旨に心得るに同
人渡来より採録する

海舟書屋

官吏

エケレス人サカリールより九州迄南方測量し
中々有るが志望有るが事多きを以て
日外國事務宰相の書面を以て取用するが
条約取結の報に於て測量等々の事
可成りエケレスとフランスとの儀に
當りて返答するに由安令の事と
此方

条約中測量の事と
官吏

官吏

清吏之廉を以て又其美を以て屬も其に在

多吉即

不足免之屬を以て其に屬する測量の儀を國中一統
不兼知るる吾輩に於てハ昨年以來右一條を自腹食
り不安な第一コモトール濫用再ハ申立も有るに
一命を極む覺悟を宿寐只々以て申すに心痛を
在實に袖を裂き下りて天を以て知るに有る能

有吏

正直の意を天より可徹人心一定の事ハ取寄分測量
の儀を申す可成第一其より自國政府より其

海舟書屋

命を以て其に一應の國政府に申立コシエルゼ子ラ
一ル此地に在るに上を引來し不都合を不成就
取計可申す旨申掛を以て下り給後

此方

急を以て其に命を以て大其に申立コシエルゼ子ラ一ルに
入感謝の意に在る

官吏

幾重より其安心を相集む取計可申すに其は幸也
程に片身柄を以て今日より申入を以て其に其目
政府に申すに其のふ其に其に其

此方

其政府の事は中絶する事ありし所不共なり

測量一併に重なる中絶する事ありし中入る

多吉郎

實に此儀を吾輩に命じし係りし事亦能く勘考
されども重なる中絶する事ありし中入る

省吏

互に親睦を取結ぶ國柄多し國中一般に迷惑を成
せしめざる事ありし中絶する事ありし中入る
中絶する事ありし中絶する事ありし中入る

海舟書屋

此後

此後之を以て不都合ありし事ありし中絶する事ありし中入る
事ありし中絶する事ありし中入る

省吏

省吏の事務は外に事務ありし中絶する事ありし中入る
省吏の事務は外に事務ありし中絶する事ありし中入る
省吏の事務は外に事務ありし中絶する事ありし中入る

文久元年辛酉七月廿日

對馬守

向々口達々書取

神奈川より長崎箱館へ海路暗礁等多是
迄摩々破船有々及難儀多々此處英國の測
量儀中三人命も拘りて幾有は是許に成且
濟國の於て進々大船出米航海に之を以て巨細
測量不能届々之を差支可々其旨古英國軍艦に
外至事仍し軍艦幸仍し目付支配向々者共為系

海舟書屋

組一同測量為致進々繪圖面書出亦々之を以て
口達可々其旨有々付々之場和々上陸も以て
測量之勿端食物等皆積入る儀も可々其節
之系組々役人より中談次等想々不都合々儀之
之振可々取計其事

藤堂和泉守家来々之左々出函呈出

神奈川より長崎箱館へ海路暗礁多々是迄摩々破船
有々及難儀多々此處英國より測量中三人命許
相成りて英國軍艦へ外國奉行由軍艦幸仍し目付支

配之元在系組以越下付其達之と越若知仕之右海路
 測量之做下付之と各論伊勢海之系込中官家と
 有之第一右の海之系込之儀と
 海之原も有之右之地在權之極之保之と之恐入
 之取黄下付志州海より内之系込之と之拾取板之
 策下卷之元測量之儀之ふ米和島之ふ米假米心
 得居之者も之と之問之候之義之と之取板之取書存
 其取書以序系組市役人之始之末之其達之成
 之振付之書之

七月

海舟書屋

十一月左之由書付從京都之仰出

今卷英之測量之儀之と之趣 神宮之言之と之趣
 之と之趣 関白之遊 序之と之趣 神宮之と之趣
 之と之趣 仰之と之趣 其取書之と之趣 如之と之趣
 之と之趣 思之と之趣 之自然神之郡志摩之と之趣 入之と之趣
 之と之趣 神宮之對 序之と之趣 神宮之と之趣 不之と之趣
 之と之趣 爲恐入之と之趣 皇國之瑕瑾之と之趣 可之と之趣 必
 神之郡志摩國之吳人共不之入之と之趣 尚又堅固之と之趣

後... 中... 心... 指... 遊... 早... 國...
... 達... 東... 知... 計... 方... 以... 思... 事...

伊勢志摩尾張測量儀中上之書付

外國樹

大目付
古目付

最... 英... 利... 測... 量... 松... 濤... 本... 勘... 伊... 勢... 志... 摩... 尾... 張... 三...
... 國... 古... 除... 之... 指... 西... 類... 和... 本... 右... 之... 付... 之... 考... 方... 亦... 有... 之... 精...
... 詳... 測... 量... 圖... 取... 調... 可... 表... 海... 方... 之... 由... 約... 束... 之... 業... 務... 以...

海舟書屋

年... 西... 巨... 人... 之... 由... 測... 量... 儀... 中... 上... 之... 書... 付...
... 都... 多... 英... 必... 同... 抗... 法... 取... 振... 之... 和... 本... 右... 之... 付... 之... 考... 方... 亦... 有... 之... 精...
... 必... 今... 以... 考... 之... 國... 測... 量... 儀... 中... 上... 之... 書... 付...
... 古... 軍... 艦... 幸... 勿... 以... 山... 沙... 汰... 和... 威... 之... 考... 方... 亦... 有... 之... 精...
... 中... 上... 之... 書... 付... 以... 上...

酉十一月

伊澤美作

山口丹波

駒井山城

松平備後

松平次郎兵衛

浅册 一學

京極能中書

振部 帰一

妻木 田宮

書面之趣 石調之委 彼方 却之 陸國海岸測量
圖 成功 以之 迄 其 旨 合 可 有 好 在 何 勢 志 摩
尾 結 海 岸 之 分 之 地 方 之 測 量 圖 取 調 出 流 之 積
和 成 右 之 上 之 何 水 之 其 船 之 測 量 不 能 仰 付 其 之
之 相 成 以 者 之 間 大 目 付 出 目 付 上 之 通 者 之 調 方

海舟書屋

之儀 出軍 艦幸 以 之 修 濟 之 方 与 幸 存 儀

酉十二月

松年 出雲守

小笠原 長門守

竹内 下野守

設樂 八三郎

福田 八郎 右衛門

池野 貞一郎

玉田 安房守

書面之趣 一覽 劫 命 仕 之 事 之 旨 人 之 之 測 量 之 儀 中

出於三付子之英國同族亦取拔子者來其子者美伏仕
可者之間解勢志摩屋張三ヶ國測量之儀子之
軍艦其切之在仰渡精詳之測量亦其渡亦故可然
幸存私共評議仕改取中上之儀以上

酉十二月

新見書房

村垣淡路

津田近江

竹本圖書院

大久保越中

一色山城

海舟書屋

密部諸河

文久二年戊正月十八日對馬島中津

外國書行

同主命之圖

遊航海術由來其子付子之海路之險易熟知
之儀必要之付子達子神奈川之長峯若館
之海路英國測量之狀由軍艦組之若系組一同

測量之法 仰付大石船半途多長崎表より帰航の
 船に付見込の通測量を不致し共一辨何路
 志摩尾張三ヶ國海岸の儀を故障の助も之を在
 付英人測量の儀に成る付以後外國より測量
 の儀中出せ共三ヶ國丈の差止可相成る旨何れ
 多測量を不致し其海路險易熟知可致期を
 之付此處右三ヶ國海岸の軍艦より測量致し
 時難等之勿論海岸一停の形勢巨細法番の面
 取認航海の節難破覆没の患を免れ下致す事
 亦之通軍艦より相違の事

海舟書屋

但右三ヶ國領分有之面之に過ぎず又表刑
 加之上可相違の事

英の測量船は皆系組の支配向系組中
 日記の儀十上を書付

外國奉行

先般英の測量船は皆系組の支配向の右
 系組の内中航廻場を并取計振日記等認差出
 付一覽其の要廻場測量の儀勿論船將の外引

今向等一册之取計振巨細相分私共口上之心中上之
色之自然遺漏錄之付右見記在添以帳中以上

西十二月

村垣淡路守

津田近江守

中本隼人正

大久保越中守

一色山城守

畠部駿河守

英國測量船之系組中取計振之依付

中上之書付

海舟書屋

荒木湊三郎

先般神奈川長崎船舖等之船路津之浦之測量之
茲有英國之中之系組之許右本去七月中右測
量船之役之為片取係系組之修付同十月中長
崎表之航廻同所之古用漏右系組之月中取浦
場之測量之古外船將之引合向并之取計振等
別紙日記書面之通之在產之尤附屬之測量船之古
以軍艦之標方書夫之系組之在諸事之合取計之
儀之在得在每之本船引之取測量等之取計之
之各船取振向書巨細一纏之古調之在付是又

船之乗組ノ日記を以テ中上之儀ノ日記ニ冊添出候
中上之儀以上

酉十二月

萬延元年辛酉七月

英國測量船乗組中日記

測量本船エクラン系組

荒木濟三郎

七月三日 晴

海舟書屋

一 今般英國より市國周廻津々浦々測量儀預立
市國局相成り有右測重船序取締所用とて荒木
瀧三郎立石得十郎富藤卯吉郎内山人目付栗崎
彦三郎内軍艦教授方福富金吾塚原銀三郎系組
并仰付候下有今登後一同内軍艦操練所に落合諸
事は用向等亦合操練所より押送船式被序用候
二 右立右儀々并賄小遣等一同系組夕刻同不出帆
終夜神奈川港に相廻り事

七月四日 雨

一 今朝神奈川表に着港即ち英國測量本船エ

テオの船は一同乗越船將口ルに面會今般月周
廻測量中三々有古為取締役各船は系組
仰有る音中達且測量付兼ふ計仰流り以趣意
柄當心得一夜船將及就得之委何由承騰
順中望ル

一之般月後測量各船は系組人員は流定之候アル
コックより昨夜書翰を以中越未取未又貸渡
部屋も補理不中何き事方と出末方事は取
可申旨未達之上陸止宿之方可然上旨船將中
時共一本今般月用之船中内取締船重相

海舟書屋

心得其上上陸止宿等致之る荷物運送等之
敷も掛は有可取來之今日より船中不居付有申
時之左其事之部屋出来迄之寺官之難居致
吳之振中関有付濟之郎漫中郎彦八郎三人
ハ今日分事船は右付事

一ゴンボートに可系組者振方兩人并舟首所を即
以程鎌倉測に英船系掛之付右引出之為ゴ
ボート差是を官帰港以昔系組兵多振船將中
以之付其候教授方相達之處右ゴボート帰港
迄當港碇泊し序軍艦昇平丸止宿居在申事

一 測量船一同當港出帆日限等船將に相尋る事
 未ん七日八日頃出帆之趣申付事
 一 萬石舟軍艦方の請ふる測量船に可引揚日之
 九月國旗大形四流小船同新都合八流一船に二
 流之積を以一同船將に相添置る事

七月五日 半晴 半雨

一 今般乗組を役々當港に着并船將に及引合を
 慮り出帆日限相延之儀等委細所用状に相認
 右運上所に持糸所用係序差支方相違若菜
 三男三郎に相渡る事

一 當港碇泊中海陸往復用船を差支ル有津島川
 方相達日所用船を艘々申付附船為致る事

七月六日 雨

一 本日日曜日記事なき

七月七日 新晴

一 今日コンボート、エルジリン船トフ船式被共豫倉より
 歸港に付教授方系組儀船將に及引合を申付
 エルジリン船に塚系銀トフ船に福岡産吾ら有る
 方即為系組庶務トフ船聊破損所出本ルに付
 右集航迄暫時為代品川碇泊しコンボート、レフエン船

今日中呼疾之積二付右の金吾知事即亦人為系
組慶之留明朝夫々は為系組慶後船將中呼疾二付
其取右三人に達置能

一江戸表組既流より急御用物運上之所より右達置に
付據封致し之を為當和泉守より立之書面反對
之殿に仰渡之書面添付勢神料の上陸を勿論志
物海より内之を測量可差留候説得可申趣二付
毎船將に申渡之書面添付之申付コトホト
組々之の取付心得申渡置之申

七月八日 晴

一々朝塚原銀二郎エルジリン船に福富金吾高藤お
太即レフエシ船に系組之申

一昨日神奈川在留英國人ハイナ一儀申船に系組寫
真之具申持越同航之船子二付船將に船子柄質問
上之を委令取測量二付津浦之水路之経路之積
所之寫真等致し積之を正連之趣二付右之測量之
寫真之餘申二付諸所上陸等之申二付今度國內
人心不折合之時即意外不都合生可申御難
計甚掛念之旨申渡之趣致し船將に於て願着不
致趣二付連之右取之者系組在立之申之必定不都合

合可和起之論、有右系組美留方委細用状
に認江戶表に美左方運上所に相頼濟置事

七月九日 晴

一 神奈川方分測量毎船英人系組人員同合有之在
二 付彼方士官に召合人の數書呈進事

一 市日夕七時中船并ゴンボート、レフエシ船一同神奈川
港出帆、夜相所觀音崎内大津沖に投錨一泊事

一 ゴンボート、エルシリン船本日一同出帆、交換所有之
り官修復之上房別測之寄事、落合を積引列事

七月十日 半晴
半雨

海舟書屋

一 本日昼八時大津出帆、六時半時房別測之寄
内館山港に入津碇泊事

一 當港に稻葉兵部少輔領海、付上陸者不相成
事、船將上中談置事

七月十一日 晴

一 稻葉兵部少輔家来地方役人千葉佐十郎、辰越
子所觸達、之趣主人分中、越當港入津、付房都合
相案を採用候事、香香中候事

一 碇泊中材方役人番船に着系組美出置、用向
事、右番船中、達者、中系佐十郎中候事

一 昨夕越江戸表より急用状神志川表に到来し有
 同所定役吉田量守持余押送り船より今日當港迄
 既越右内用状相渡せし付披封ししを 変置本二浦之
 節儀此程より痲病と難保候事と趣奉り申付
 以迄お集美差暮り今度より用内難お勤付し
 以上代々し神志川調役合系猪三郎可也美差
 趣奉り申付追々快方有別候代々しお美差
 不及候尚用状相認吉田量守にお渡右神志
 川表に急速差を積中談事奉

海舟書屋

合原猪三郎は美差儀難計を有江戸表に序
 用状を以申立次美差念吉田量守にお話若
 一 猪三郎は引違りて其後通達の中旨申談事奉

一 去ル八日神志川表の内用状を以申立在英國人ハイ子
 儀系組美留方昨日英國アドミラル對馬古殿内
 定に氣上し付内同人がハイ子一系組の儀係美留にお
 奉り申決りハイ子一着系組有者アドミラル申上
 趣奉り申付心得を以ハイ子一神志川表に美留の折
 判可致者序下知し有者趣奉り申及疎索申折
 節アドミラル英國總領事松リンドー船に系組急

長岑表は越え越え三島港に立寄ハイ子一系
組差留を付船將に於て早速承伏致し其後
船條市用状を認江戶表に申上る事

一 皆港の高島沖に停泊し二嶋に立寄者の上
陸天度測量より一處古申上る付素より人家
等も少く離島より外差支も無く付上陸は
多敷候に役々人々附流居越え事

七月十二日 晴

一 今曉七の時辰蟠龍丸序船に神奈川調役並出
役宮本小一郎系組居越え首木海に即病を蒙

二付右爲代合系務之郎可申差を要同人不快付
爲代小一郎居越え首木海に然る事也昨十一日
江戸表の序用状を以何處に於ても已る候に
最早退り病氣も快く此分より可申動心
得に付合原務之郎可申差を要不及首尚序用状を以
江戸表に申上る事最早に断返し相成候に越小
一郎に申上る事委細承知に付即日神奈川
表に右序船に乗り立候事
一 船中系組者退り食料欠乏を以買入序用状を以
二付未だ村役人中達上買入方取計事

一 神奈川表の引張りゴキボート、エルゼリン船の塚
 原銀八郎系組孫在りて右船做コアトミラール用
 向有之支那上海へ美老船ヲ付品川碇泊しゴン
 ボート、ドーフ船に銀八郎系組孫在りて右船中在り
 付幸ひ今日本船に系組孫在りて西國人ハイ子
 儀レフエシ船に為系組神奈川表の美老船付
 右へ越銀八郎に相違を事

一 神奈川表の當港より津浦へ地名并所領私
 領へ韓家浦へ港灣へ移移等船將其外より問
 合りて其系組一同心得不申以故上陸測量

海舟書屋

等取計振りも拘り不都合に付仔細勘解由著る
 測量繪圖序軍禮方有之題に付右由題に方儀
 并ハイ子一差支塚系銀八郎系組撰採留儀巨
 細古用状に相認今日福宝全吾齋以藤印を即系
 組にゴキボート神奈川表の孫越に付右事人の序用
 状右添運上所に右類差を方取計を事

七月十三日 半晴 半雨

一 今日日曜日付記事とす

七月十四日 晴

一 近代官佐木道孝郎支配所房砂洲へ霧出鼻并

大房崎雀嶋等之経緯為測量上陸上之為船
將中之至之付 右為取跡山小入目付栗島之即并
立石得十郎美添之越又刻各別條歸船之事

一昨十二日神奈川表之測量之ゴニボートレフニ船無人
ハイ子一儀之至之即今日出港之立石之事

一當港最寄村之測量見物多人數多越不取締
之付倉料等賣込之者之即之根之船中之立石
儀不相事方村役人共之運置之事

七月十五日 晴

一昨十四日江戸表組頭之之所用状神奈川表之

海舟書屋

赤之越之同所下番右所用状持参相届之付披
書之之之者去之十二日伊能勘解由繪圖之伺淋
之と昨十四日品川沖破泊之ゴニボートレフニ系組之塚原銀
之郎之由渡之越且所領私領色分繪圖之昨年所
炎上之砌市焼失之付所勘定之味役之回歸助所持
之地名出付横帳之冊之所用状之封込之廻之右家之
付右之清用状之即刻之認之於神奈川表之立
之積之右下番之相渡之事

一今夕刻塚原銀之郎神奈川表之押送船之雇之
越之者之銀之郎之系組之立之ゴニボートレフ支那上海

に越後を二付昨十四日品川沖出帆神志川表に参
り同所よりドー船に可系留所右船修復出来
兼て二付昨日品川に在る漁船等何能勘解由湯
量繪圖持来今日神志川に越後を二付右ドー船出港
着迄暫時本船に系留待合を極極に度

一今日塚系銀八郎神志川表より越後浦賀の番
所にて越後急所用向より當港迄越後を二付及
此より右に越後急所配より達するまで通船難在成
す規則にて渡共今日より越後急所掛り像より達
る儀に心得有通一可中より此迄達有るに越後

海舟書屋

一今日浦賀與力合系操船中にて越後急所用状序
右に越後急所表より中より越後

七月十六日 晴

一今日本船ゴシップト一同當港出帆房物外海岸通
測量船にて積り付多分此中にて歸港可致夫迄測
量士官三人并水夫五人高島に在り今夜月出
入汐差引測量船致意有船將中立右に令く離寫
る外差支も無るに二付右より歸環系銀八郎
附流心付船と相違有

一今日朝四時本船并ゴシップト館山港出帆房物

外海岸通り測量の續り

一 今ヨリゴンボートを房州布良灣より同ヨリ白濱迄迄
新港内の一泊之事

一 本船を海路暗礁等を探り白濱沖合一泊之事

七月十七日 晴

一 今朝より早碇村沖合の高塚不動山沖合通り
測量同ヨリ白子浦迄迄羅盤を針を測り傍に向
け今夜ヨリ時頃ゴンボート一同館山に帰港着碇之事
一 塚原浪太郎昨夜の高島に英人附添居る處測
量右海英人一同帰船の趣申す事

海舟書屋

七月十八日 晴

一 昨日測量の事より房州布良沖合暗礁数を所相
見より付於今日もゴンボート美遣夫々探索を漏
夜に入帰港の事

七月十九日 晴

一 此程江戸表の長廻りをして伊能勘解由測量の
番船得一見跡一経緯度并沿海浦の詳細測量
の趣を述べた事にて一般測量繪圖仕立事と
由以上精密を求むる事既に右繪圖面大中
内一部は貸渡す事今般測量の浅深暗

庶其外書入るに速に功業を成可なり今日船將ゴ
 ンポートは嘉組神志川表に於て越同所へ英國三ニスト
 ル、アールコックの船を以て右に越同人の相話に江戸表
 政府は借貸済可なり預積り有り尚嘉組役も分り
 其候政府より申立志願の由を扱取計置候事
 將中在り候右に趣委細は用状に右認序月番
 奉初衆水野筑後守殿に申上り候事
 但右は用状をゴニポート嘉組福岡守に
 申上り候に右渡神志川江戸若松探部合
 次其美多に於て申上り候事

一 今朝六ツ時船將ゴニポートは嘉組神志川表に
 向て出帆候事

七月廿日 晴

一 昨日曜日候に付記事一紙あり

七月廿一日 晴

一 本日英國女王のホスベント王、プリンセス、エルベルト四拾
 一年誕生日に於て當に付彼國禮法に趣き正旦九ツ
 時祝砲廿一發打放可致り兼て船將の命令に
 之より一等士官中在り候品部材に警務不致
 扱着心得材役人共に達置候事

七月廿二日 晴

1911

一 去十九日、コンボートの船將系組神奈川表に無事
 此處今日四時頃當港に到着、然る處系組福
 密金吾齋屋印を即組取らるるに、所用状持系
 相済之付披露し、其處測量繪圖を儀三付以
 程船將中より次第に送奉り、所分を仰と相成
 其處尚英國ミニストル、アールコックより同種申立然
 り、其大中之部を所管上之御座燒失に相成、此處
 澁船中執事等、此程の廻り相成り、少く部を其
 儘船將に可なり、是等事、對馬に渡り、沙汰を付せし心

海舟書屋

浪を以、彼方は海に舟計可申、尤系組は用申、右
 繪圖面を、其等事、差支可申、留入用之部を互に
 用辨可致、右左橋門、扇、アールコックに引合
 漏之趣、右達之付、右之趣、船將の委細申達、右
 面を教授、右其内、目付方立合、即日船將に相済、此等
 一 神奈川表に引残るコンボート、船破損不出、来と朝
 神奈川港出帆、夕六時頃、當港に着碇、此等
 但々、船にエン船一同、神奈川出帆、此等浦賀ア
 シカ、當り、上陸測量、此等、此等、延着、此等中
 此等、大途中、此等、此等

七月廿三日 晴

一昨夜ドーラ船着候付萬々談書之通り今朝探察限八
郎小窓の運右ドーラ船は糸組を申事

一今日ゴンボート被相物塚の島より小田原湾測
量仔巨海岸邊迄差を多し船將申立候付
右ゴンボート糸組を授け申事申候即ち通達上
陸候に取計振取候向書委細申達候事

但ゴンボート被艘共昼九の時頃出帆候事

一本船を夕七の時餘山港出帆候至七島に向は候事
但今夜大島利島北十里計沖合一泊事

海舟書屋

七月廿四日 晴

一今朝より大嶋東海所に着候波浮港は深淺為測
量端船相卸一栗島彦一郎立石得十郎附添候
越々波浮港を狭隘申候難事入越且海所筋
巖石屹立本船難々糸寄今夜も同所沖に漂ひ
一泊事

七月廿五日 晴

一今日大島周廻海岸筋為測量端船被候士官等
夫々志願波浮港船難事相候事

一本船を大島北岸岡田村沖に糸廻り同所沖

に投錨之事

一岡田村役人とも本船に召懸き付て取測量とて
當り航廻の事より自然出寄事より上陸測量可致
儀も召懸き付土人共心得速事の中達置事

一 大島西武三里沖合に外國船を被相見し付合國の号
砲一發發し其國旗等引上り石中鈴敷懸り即刻
反船より走り附右船に乘込相見し處ニウゼーラント中
英國高船より神志川入港船より懸士官等帰中候也

七月廿六日 晴

一 船將并士官等八名岡田村出果子代々寄り上陸経緯を

海舟書屋

測量船に懸中候に付後附添幕越夕刻一同
帰船に候事

七月廿七日 曇

一 七日日曜日より例に通り船中憩休に付碇泊し積り
昼候分西風強く時化換換相替り付夕七時俄に霞
帆夕六時半時房物館山港に再登碇泊事

七月廿八日 晴夕分雨

一 去ん廿三日相宜海岸為測量差事よりゴニホート被艘右
尋りし女幸り昼八時半時館山港出帆相州城ヶ島
沖より今夜一泊事

七月廿九日 曇

一 今日相州小田原灣沖合よりゴッホート武艘と落合
其處ゴッホートドーフ松石炭を切取付右積入と
之日神奈川表に差寄る事

一 昨廿八日英國海軍艦オージン船神奈川表に入港
之越船将陣及び右オージン船将は用向有之
付總房海路略總書を採寄神奈川表に可
越寄船將中略事

一 塚ヶ島島寄寄略總書を採寄レフ又レ船一同終
日相探略事

海舟書屋

七月晦日 晴

一 今日神奈川表に可乘入交終日瀬風多本船運用
不宜と表総本要津沖に一泊事

八月朔日 晴

一 今日朝早時頃本要津沖出帆昼八時神奈川港
に入津碇泊事

一 ゴッホート武艘を今朝房山裾通り勝山辺より
蘆島村海岸を測量差遣在り船將中云々
系組教授方并卯辰即其如右達尚為取締
内小人目付栗駕彦之即右ゴッホート系組今

朝五時頃出帆之事

一 當港に碇泊し限并測量國之長巻表に右廻り
其込合船將に右巻を巻出港に五二の碇泊合糧
薪水も取入存置七島測量夫より一里強に航廻
遠州市前岨より志州島羽に渡海嶽記浦に測
量四國表海岸を通り測量夫より日薩を経て長崎
に右廻り同所迄より右巻測量に止る積り付本
巻表を陸路歸府致置に於て中より之事

八月二日 晴

一 去月廿三日房州館山港出帆後測量場所

海舟書屋

并計振寄港に立戻り次第長巻迄に測量に
止る同所より所用漏陸路歸府に積船將中より
趣等番細に用状に相認今日運上之所に持込に
用便序江戸表に差立方右巻置に之事

一 昨日房州館山迄に龍島材海岸に碇測量に
於てゴニボート敷板右浦に測量に漏合り當港に立
戻り碇泊之事

但本文ゴニボート並別條測量相測する右巻
紐役の分中より

八月三日 晴

一 ゴンボート被仕石炭凡五十噸程積入至皆其後運
上所仕中迄是迄松船積入付今日運上所へ
積入積入方中積入事

八月四日 晴

一 記事 無し

八月五日 曇天 風烈

一 記事 無し

八月六日 雨

一 ゴンボート被仕石炭今日石炭不致積入相違事
係組者より中越事

海舟書屋

八月七日 雨

一 昨今出帆積入船將中迄是迄付出帆既合相違
事要事二日雨天風烈時化操扱付見合居候
事快晴 風順次第出帆積入船將中迄是迄

八月八日 晴

一 今般船中役積入小遣人且勘助事 其の病氣
付事解儀人代り美入事 右勘助暇出呉事 探河内
屋半茶子代り書面仕中迄是迄事

一 昨六日、ゴンボート積入石炭代金賣込人仕在渡屋
事申立事 右賣込人呼出し代金不納事 渡屋事

八月九日 曇夜に雨

一 昨日河内屋坐年々代の書面を以て中々少き勘助
病を患へて出陣手代共呼出。一應お礼の事書付て遠
も寄つてお慰めを相請へ上右勘助暇を
人代とて清菘と申者河内屋半平の差入し事

八月十日 雨

一 今日出帆。積り雨天。付見合程と氣次第
出帆。積れり。度志豆物下田に渡越。未だ天候見
定解。七島に回航。測量可致。然る處。此節。揚子橋
予志。此候。不空。自然。時化。颶風。昔。可。難。計。素

海舟書屋

一 七島周廻中難風を避る。有。碇泊。海。港。日
多。趣。有。右。橋。前。豆。強。浦。可。然。港。に。航。込。積
故。右。兩。國。港。案。内。者。有。右。橋。子。柄。一。應
右。長。春。官。呼。出。兵。松。將。中。間。其。付。外。心。當。り。是
の。も。多。神。奈。川。水。主。取。勘。助。呼。出。右
之。趣。中。談。水。主。内。人。浦。案。内。之。の。出
其。付。船。將。引。合。之。事。程。質。問。可。右。事
今。般。長。崎。表。込。水。先。着。案。内。者。案。内。之。趣。中。其。付
其。取。當。人。の。存。寄。儀。之。家。内。病人。等。有。其。儀。の
望。之。中。其。取。當。其。取。當。相。對。之。事。

八月十一日 晴

一 今日日曜日付外引合船もとまると付と係組及び上陸夫々用年いそし夕刻一同帰船以事

八月十二日 雨

一 去月十日英國アドミラル同西憲兵軍艦にと係組神奈川出帆長崎表に碇越来り對外并若館に航出今日出港のとき所々要界前支那上海に差をきりゴッホート、エルジリン船近き紀州浦に長崎表より相廻りて積り取計を付右の富船即ち係組に於て予をトーフ船直に紀州浦に可る差を積り付右トーフ船

海舟書屋

1017

は卯を前乗組エルジリン船に出逢次其右の係組を右も據り都合と寄アドミラルより命令して越船將中を右に付今日直に所を即トーフ船に轉移為政の事
一 アドミラルを今日レフエン船に係組を以て江戸表に可る越越り付卯を前乗組に換替り并據り發帆都合等いさの序用状に相認レフエン船乗組福留産共は相渡江戸表に差をきり事

八月十三日 晴

一 レフエン船よりアドミラル江戸表に送り夜に入海港に
一 神奈川水主既取勘次郎等子方船中その是迄

外國船の雇水先等は一泊海浦の案内に越船
 將神奈川居留の外出入り及寄附に付右方船雇入
 長寄表迄連越の度候中三々寄附者も神奈川等切支
 配筋の如の故同所の掛合の上ありては自儘に雇入
 る儀も難お成越中候も寄附分り中出帆に積
 故即刺雇入お成も操取計具も強中三々寄
 立名得中郎也方船の連運上祈に越船符中三
 之趣及掛合の事外に差支も無之趣も只刻り船
 の運上祈より水先案内に渡船中の連越右之趣
 船符の中間に候一日或はトルル候に任負船了の差出

海舟書屋

談書より雇入取極の事

但右方船係船中より自然病氣其外非常

儀出来の節も未だ取計振も良し候に付寄

勤次郎の書面取極の事

一 右方船水先案内に雇入の度其委細序用状にお認
 為念江戸表組既前迄中立置候事

一 コンボート船今朝五時寄港出帆ト一ツ船を直に紀
 州浦に航渡せんしに船中尋ね積りレフエレ船を直
 州浦に量り下田より市船に落合を積り

一 本船夕七時神奈川開港より多振折角急風より

帆船運用難在本牧沖に投錨之事

八月十四日 晴

一 今曉七時許過本牧沖出帆順風多伊豆沖に越
大島前より英國軍艦リンドー船に出逢船將連
右船は越用年お漏開帆豆物祓子本宮辺に
テコンポート、レフエン船は落合夕七時許過一同下田港
に入津碇泊之事

一 下田町役人岸柳寄村役人共船中の出用向
有るを以て承爲り申す

八月十五日 曇

海舟書屋

一 今朝ゴニポートに港口に霧暗礁浅深測量致し
趣付に渡系船と相違し出船致し刻碇泊之事

一 碇泊中自然水未お食料為買入上陸書し
多志不都合に付食料買込人船中にお差出書
村役人にお相達賣渡り方取計之事

一 當港の天象次第七島航廻測量時宜に志物
島相に航渡り致し船將中にお差出書に藤堂和
泉中にお差出一件以程神志にお差出書に
一 此の如き相違念に付再座及誤得り多志勢
地方に志決り上陸測量致し香取保志物

島并答志島等之離嶋之有之故其亦有
 之間及且之物解良湖崎尾物師壽出鼻等之
 一寸上陸経緯之度相凡中夜且ゴニボト之海岸通
 り測量者致之儀之可有之右等序差又之測量繪圖
 等出来加之者中ノ船將之心裡之志物海内の一
 歩も測量之致旨等との見右之者有者念之引合
 之操操番細序用状之在認組既元定之今日下田
 町之宿次之儀差之者事

一 船將并士官等港内測量下田波ノ場の上陸天度
 相量之付為取締意木海之即出小人目付栗崎

海舟書屋

彦小郎附流経越之事

八月十六日 晴

一 ゴニボト志今日當國細代迄之同小伊呂尾崎迄
 為測量出帆可為致先布船之之出帆解更之寫
 航廻一値日之當港之落合之積中ノ時之自之
 右心得ゴニボト乘組福岡金言之在運入

一 今朝五時幸船下田港抜錨針七名之内三宅嶋
 に向當帆上ノ之變夕刻神津等最寄天源岩辺
 之旋寄同断沖之漂之者入風雨共之在起り
 追々烈風暗黒之紛之黒瀬川之唱之沙路之系念之

一夜之內西南風六十里計押流之速也

八月十七日

胡雨
昼晴

一今朝之早尚風雨不收方位多兼有律度相亂
針之在倉島上取有極之處夕刻鳥嘗過上系
付之早最早之日也今宵今夜同所沖之
漂洄之事

八月十八日

晴

一昨夜之早尚風雨不收方位多兼有律度相亂
針之在倉島上取有極之處夕刻鳥嘗過上系
付之早最早之日也今宵今夜同所沖之
漂洄之事

海舟書屋

昨夜之早尚風雨不收方位多兼有律度相亂
針之在倉島上取有極之處夕刻鳥嘗過上系
付之早最早之日也今宵今夜同所沖之
漂洄之事

八月十九日

晴

一今朝測量士官端船之為乘組守津本等運之涉
深測之量多涉也船將中之有者取係乘船者
之即系組之也

一船將若士守人八丈島上陸經緯度相量者
中之有者取係乘船者之即系組之也

所用極善心漫相達地勢崇卑尋其內湯量亦
滿一同歸形之度

一八丈為東北海岸通瑞船古官者多延淺深暗
礁等湯量為致有船將中守有石得中即
若系綿系組系組之處夜四時以歸船同修之根村
海岸之富山北岸遠遠測量之

八月廿日 晴

一今朝五時過八丈寫末吉浦開航東北之方也
り未分三^宅分^宅向倉島四十里計沖合島崎
方一向直一夕七時以倉島四十里計沖合島崎

海舟書屋

一名伊難波 之唱之 巖嶼之被付天摩水重り未分
神津島之向右旋之夜回所計之漂泊之事

八月廿一日 曇夜入雨

一今日神津之空之有向遠巖嶼暗礁等測量了致
積之雲追々風烈時化移旋有胡四時沃分候之針
之重州地方之向多右旋一夕七時過豆州加茂郡
田子浦入津砥泊之事

一當所去本回備中守領分之事有船中之者根之
上陸等以向之有不都合之付取歸向昔委細
船將之中了錄之事

八月廿二日 新晴

一 大田備中守家来地方役人加藤儀左衛門船中
其越之般測量之形は糸組片周廻之趣に付第一体
中より領海に碇泊せしむるに諸事用辨不差其概
可計計者無事主人の船中付官用向等者之に
之を復騰業を致し居る中事

一 船將よりコニホト、レフエン船將の中 達度儀より
之付横文書翰一通差寄居右に當浦續安良里港
に碇泊せしむる積故同所に向けし是を度儀中より
其船レフエン船系組福屋屋名に用状を認換文

海舟書屋

書翰表込田子浦材役人中付安良里浦に於て
但翌廿三日レフエン船出港へ入津安良里浦に不
相廻り用状と同所より差寄居事
一 田子浦に船將其外上陸天彦測量に用て居る編
葦木編之即栗寫彦公即附添居越居事

八月廿三日 晴

一 去月十六日豆物細伏浦の同心伊呂屋寄越居事
其レコニホト、レフエン船に於て九時半時田子浦に入津
是迄測量に用て居る浦に別條を海に寄居福
岡金吾中付居事

一 登八の州本船并ゴニボート一同田子浦出帆駿州地
向多相候之候夕七半州道駿州有津郡清水
港に入津碇泊之事

一 ゴニボート、レフエニ船石炭遺切有之付右若積入神奈
川港に差寄之旨船將中ニ有之付其右若系組福見
全各に相達之候五時出帆之事

八月廿四日 曇

一 駿府町奉行加藤主之政所支配所清水町并江尻宿
役人共船中ニ宿用等出之候事

一 今川要作在代官所真津宿并三保村役人共船中

海舟書屋

正保越前同新中守之事

一 登後駿府町奉行並同心長高信助船中自越
之般測量船寄港碇泊に付支配所取締諸子用
辦之者清水町に寄岐中組與力松井官兵衛同
心若路信助江尻宿に同心小倉隼太出候様立寄
之付船中食糧其外上陸等之付取次都合能使用
相成之様候旨に付申付之旨不取放出張之趣申
付之旨三保村出寄清水出寄等に測量之為
船將其上陸に申之様申可有之者心算如左
之筋に之旨相尋之旨申上陸に申之旨

支多之右位中

- 一 出港破泊中湾中浅深测量之保案其外出崎
以上陸経緯度測量致之者有船将中三三二付
皆所之序料所之別段差支多之同例之通上
陸等致之節之役之可附添中聞是
- 一 出港破泊中附添并臨時見出之等之節用船
中三三二付清水所役人中中達日之用
船之艘之附船之致之

- 一 清水港口三保崎之船将之外為測量上陸之付為取締
其示滿之即乘島先八部之石得十部者

海舟書屋

附添員越之事

八月廿五日 雨

- 一 廿日曜日之付船中者外出測量等之事
- 一 昼後清水港に出役之船中加前之船中組與力招
升官兵衛同心長富信助船中出越船中其の
長官之儀者用任周旋之之者有之兼之其の
中中付之越越之深古有之其有厚意之其船将
其の一應中聞之其致甚懇親之候船将之於之
深之感謝之之就之其船中者合糧等進之
之致之其會糧賣込人船中其長官之抗極其

船將口右邊測之即儀者其即同左船行西舍景
書也下知之趣也以此書士家國測量差留方亦編及
誤得之者其在分級アト三一二也同類之儀中然右
操人心不和合之者多作儀次其甘右場所之相除
近日遠物亦前等より上其地所大為浦口航港可
致古中少先之趣意之趣徹底了解之し之付尚
四國九州遠諸大名等折合方も不仕趣之有右國之
測量之儀も心解之趣説論之し其要右操所之差
支有之し之し四心之日向大隅薩摩等海岸浦之
測量之止之右國之沿海事情之し上陸経緯之相和

可舉尖場所之取計了中少中少右操之し之是也
之趣然之者一同安心心之し之其候早速政府に
可申之有右船將口中少之事

一 右勢志兩國測量差留方其外共謀判及誤漫の
廣之番細清用狀に相認濟之即為其即連名之
不取敢組既元之右端終之し其差之し之事

一 昨廿六日祝砲者各札松井官兵掃船中人之其越吳
其有右者挨拶の中多傳旅宿の上其越度上之松將中
之其旨其儀不及其中心之其要右操之し之其張能其
右對一不敬之書より之付是非其越之趣中之其

官為取端 粟為高彦公即 名得子即附添子越
一 森谷礼之様抄中述直之帰船之事

八月廿八日 曇

一 今日嵯川首五郎蟠竜丸を帰府可致交吉原松
破損所出来を二付之日 豆州戸田浦に越越目所
を修復しし 帰府に取取しを向首五郎儀を今
日陸路帰府積三付去に十六日下田港出帆以来
七島測量當港迄航廻し 揚振曹委細銀路の
宛片用状相認藤多郎と相渡之事

海舟書屋

一 船將より 神奈川表に 存置を同國アトミラールの書翰

并アールのコックの書翰今日有之即 陸路出之海府
二付者角方頼出を二付者角五郎に相渡之事
一 登八の半時頃清水港出帆し 多處折節多風を
運用難難三保ヶ寄沖に投錨い多し之事

八月廿九日 曇

一 今朝五の時頃三保ヶ寄沖發航九の時頃豆州戸
子浦に入津碇泊之事
一 本回舟中各地方役人加藤儀左衛門并材役人共船
中に越越用向しし 兼知しし 舟中事
一 去に廿三日清水港より 神奈川表に 美濃船ゴンドー

ト、レフエニ 船同廿六日 神奈川表に 着石炭積入相済
同廿八日 同所出帆 今八日 時辰出港に 入津に 了る
一 昨廿七日 勢州志村 本國測量 差當方 船將一
談判に 趣委 細福富 金吾に 中達に 委す 本國測
量所 差留に 序 趣意を 降軍 禮奉 叙り 由 序用 狀
を 以 中 趣 差 當 方 趣 申 上 事

九月朔日 晴

一 今朔 本國ボート、レフエニ 船に 測量 士官 舟人 等 本 組 管
國下 田沖 神子 本 島 上 差 委 一 同 所 へ 七 島 へ 内
利 島 神 津 三 宅 等 へ 寫 上 事 距離 并 経 緯 度 測

海舟書屋

量 船 一 舟 者 船 將 中 三 宅 へ 付 着 舟 得 其 履 系 組
福 富 金 吾 へ 中 達 五 日 辰 出 帆 上 事

一 船 中 飲 水 瀕 乏 三 宅 本 島 へ 付 買 入 舟 者 船 將 中 三
宅 官 村 役 人 へ 中 達 運 送 方 取 計 上 事

一 船 將 舟 士 官 等 港 口 出 嶋 上 陸 天 度 測 量 取 上 事

九月二日 晴

一 今日 出 帆 積 然 三 宅 港 口 迄 逆 風 三 宅 出 港 難 相
成 三 宅 引 船 漁 船 十 五 六 艘 雇 舟 者 船 將 中 三
宅 官 村 役 人 共 中 達 雇 船 上 事

一 登 八 日 辰 田 子 浦 抜 錨 港 口 迄 三 宅 雇 船 引 船 上 事

まより同所浦續松崎沖より昨日の神志川表の港に
レフエシ船は落合港より船將の神志川表より港に
同所アトミラールの急用向有る趣より同所より直に
右レフエシ船神志川表に差寄大彼地用弁次第出帆
一値より内証船大島浦より落合を積船將中候事
其船右乗組福岡全吾に通達し一幸船と同所より
り遠州港乗寄に向き開帆以多し候處逆風に付
今夜同所沖に泊り候事

九月三日 曇

一 本日 日曜日

一 今朝より針路は流早く帆走不宜昼後より逆風に
切居る事夕刻より係の都合不宜時化操操事成
夜に入暴風雨より船中動搖最甚候今夜は前崎沖
二三拾里計内に漂泊候事

九月四日 晴

一 今朝より颶風より追々洋中波濤も穏に相成
市前等地方より拾里の浦に過る候所前崎沖
量より相止り候事

九月五日 曇

一 今朝は浜松新宮沖に候所前崎沖内大崎

浦に向き帆夕七時迄船中事務要却大島港開
川枝口枵抗村家に入津碇泊之事

一 紀伊殿代官支配枵爪周浦下役并村役人共百
連船中にて越之般測量船紀伊領海に入津在
上諸事一々差支採用毎周旋可致旨無事家共
より船中付目不取故に船中にて且其廿七日紀州
見高郡田辺内細井港碇泊しコンボート、ドーフ船系
組堀示銀小郎より孫卯を即ち書状書所
到來本船入津次第可取旨申上越之趣も右周
輔持参差出々然ル交ドーフ船去月十三日神奈川出

海舟書屋

帆同十五日當浦上航渡未分紀伊浦測量之趣
委細中越目ドーフ船分船將上書翰封入を付
即刻船將上取渡之事

九月六日 曇

- 一 當港内浅深を測量端船或般差を津
- 一 紀伊地方役人浦儀才次下役者人三連船才上船
出測量船碇泊中用弁之為枵抗村に出張器
在之趣申上ル
- 一 今夕大島并枵抗所に出役枵爪周浦儀才
次船中上り越之趣も大島并當港海岸村に出候

〜は為測量上陸可致右支の場所も
其相尋たてし所なるに鄙人等も少
殊に山嶺の場所故何れも上陸相成
たらず柳美支の右支人中の事

一 船將のドーフ船將は是れ通達し
二 付書報は是れ中なる事ハ去月廿七日
港に於て惣志両支測量法差留儀疎
右ドーフ船乗組者未心得不中
細事用状右船將の書報一同書
郡大岩浦の碇泊し趣付同所
村継心算事

海舟書屋

九月七日 曇

一 今日曇天雨多事之付海路測量事

九月八日 雨

一 雨の付船中出入事

九月九日 風雨

一 神奈川港出航以来士官一同船中而已
不致官追了身體倦弊し右船中自然病
氣等お世段し可中同港内なる事
上陸養生し為運動者船將中
事情におり不始止此其ハ付速大島橋杭村

一海同三日神奈川港に若船回所アトミラール用糸
相濡同七日同所出帆同九日遠舟瀬航海に暴
風雨に逢一時浪多し船に損傷甲板有るに
砲丸石炭等不測海中に投し船是を輕くし
漸く風浪を凌一同急急是迄航海に

九月十二日 雨

一紀州日高郡田造浦細船港碇泊しコンポートドー船
将より當船將より書翰封込是迄浦に測量し坊
所并エルジリン船探索し損傷等委細所用状に相
認同所分村継を以差越るに自横文書翰を直に

海舟書屋

船將に相濡の事

一去月廿九日狭舟清水港出帆後豆洲田子浦并出港
に航廻損傷且コンポート船被測量航海に孫子等委細
組織完済用状を認病状を以江戸表に差立申
他内月付方内用状も封込申上る事

九月十三日 雨

一昨夕紀州細船浦碇泊しコンポートドー船將より石炭
遺物に付諸所を尋ね得共誠以事自に委修儀木
炭買入るに品柄不宣且多分調り無き故直に當港
に相廻り積り付支送に極上り木炭拾噸用意に

一 倉中ノ穀之旨古買入方取計其多
船着以莫可積入孫惣合置之事

一 コンボートレエニ船飲水欠乏之付積入倉中ノ旨之旨
来材移入之付達之旨取計之事

九月十四日 雨

一 今日日之九所國旗相建之スクー子ル船大島港入
津碇泊之旨古買入方取計其多
神之川等出帆之旨
之旨古買入方取計其多
外國人ノ旨
之旨古買入方取計其多

海舟書屋

一 桑嶋吉房ノ旨古買入方取計其多
附水野大炊次手船之旨古買入方取計其多
船之旨古買入方取計其多
大島山ノ旨古買入方取計其多
今日大島山ノ旨古買入方取計其多
所自天ノ旨古買入方取計其多

九月十五日 雨

一 大島山ノ旨古買入方取計其多
役之旨古買入方取計其多

九月十六日 晴

一 大島山に経緯天を度測るゝ為メ船將主外上陸路を
 舟着取端並木浦之即栗崎之岸に即附添居越出車
 一 長崎表のエルジリに船出地若廻り積込テアドミラルの
 命令ニ付右標索旁に津浦に為測量居るルコンボート
 ドーナ船今夕七時頃當港へ立寄碇泊事
 一 右ドーナ船去月十三日神志内表出帆同十五日紀州大
 島港に航渡同所へ一泊同十六日出帆同亦富田浦
 へ入津同所へ一泊翌十七日安藤飛弾子領海田
 邊浦に越越同所へ二日碇泊同十九日出帆同國和
 田浦に廻航續々紀州由良へ内系谷浦へ入津碇

海舟書屋

泊同廿七日同國大島浦へ相出翌廿八日加多浦へ越
 越未分津州へ航渡由良港へ入津碇泊エルジリ
 ン船待合の如共相見是亦中夜ニ付本月十六日同所出帆
 尚紀州由良の内へ再渡九州中國邊仕出に廻航
 此エルジリに船を推し兼合を交いつまも夏掛不申
 茲ニ付由良田邊浦細野港へ入津然るに時化控
 控雨天續々出帆未成無事ニ付天候待合今十六
 日同所出帆直々當港に立寄然るに右系組環系銀
 八郎船着印を印中ノ大前書廻浦場所々々
 測量々々為メ諸所出寄々々上陸等々々々得事何

日紀物家出役者に打合上陸等総て不都合
多し船取計より中時を事

九月十七日 曇

一 本日日曜日付記事無し

九月十八日 曇

一 行程中ト一ノ船紀州浦へ測量為政より田邊浦
より大寄加多浦迄湾中経緯度距離等既ニ測
量不仍局を二付尚又明船右浦へト一ノ船美を
委託する本船の測量官為人為系組中然るに右ト
一ノ船を獲て右系組藤卯太郎レ工ニ船の系組員

海舟書屋

此船將中之日付其夜水大寄加多浦に達す事

一 明朝ト一ノ船大寄加多浦に測量再渡し二付より行程
和哥へ浦測量へ節斤尾寄

神祖寺廟所有之日付上陸測量者相断る且紀
伊川志和歌山城下續故右川口に入津等へ船取計
呉多孫和歌山城出役者中二付右系組所蔵
設得上陸美留を渡共尚今船も右片尾時等を出
等取上陸測量者強中二付右系組所蔵方通舟
と取れり等不都合二付右系組所蔵上陸等船
將上設得ト一ノ船系組者其夜為心渡り右

乘組塚本銀少郎中守之付銀少郎一同船將口面
 會者多所上陸入津等差事を極細設得るに方
 嚴密船將口中候事を極細設得るにドーフ船乘組
 之者に夫々通達可申共外差事を極細設得るに
 り指圖に之を以て違背致す事申候に有為又御
 事も不都合之候事を上陸に之留取銀少郎口中候事

九月十九日 雨

- 一 今朝斎藤卯太郎ドーフ船のシフエン船に乗替る事
- 一 ドーフ船朝五時頃港出帆昨日申立候浦々為測
 量差事多事

- 一 近々出港出帆来月初旬迄長崎表上航廻同所
 多所用通候付小差共一同長崎表上陸候上之同
 船序用通候付其候為心得小遣一同申渡候長
 崎着候上之銘々旅費其外支度等も之に有被地
 差遣小遣一同に金貳拾五兩但之人に五兩に
 寄り之に給料候内より前借下々金に候書面
 心中立事候事候儀次第に申付候事候持越
 候用意金に内金銀替拜借候事 仰付返納方
 儀候帰候所上給料相渡候前差引可償積り
 系組役候相諒申一申出候事

九月廿日 新晴

一 今朝ゴニボート、レフエシ船態野新宮領浦上勝浦辺
 正為測量差考船將中、以之付即刻右系
 組福岡全吾船印、即、以通達委細取締向
 等申談朝五半時戻當港出帆之事
 一 當港出入海口暗礁淺深考測量士官亦人員
 考之付港口暗礁案内、以水先可為系組
 船將中、以之付右系為系組差遣之事

九月廿一日 晴

一 本朝七噸買入ゴニボート、レフエシ船積入、右系船將中

海舟書屋

立之付大島出役機凡周補、以談運送當海方
 取計之事

一 登後士官等上陸、以付為取締、栗島、以即附
 添務越之事

九月廿二日 晴

一 本日出雲、以浦村海岸、以出、以岸、以測量、以
 以士官、以人、以越、以付、以取締、以石、以得、以即、以附
 添務越之事
 一 登後士官等上陸、以付為取締、栗島、以即附

九月廿三日 曇

一 今日古在港沖里高途、同所港内暗礁淺深為
測量船將其外孫然、舟着取締、並以水漏、即乘船
着、舟主在邊十郎、夫、系組、孫越、事

一 去廿日、新主額浦上、辺、上、船彼
地浦、測量船、今夕刻、出港、上、事

但去廿日、浦上港、測量船、廿二日、同所出、海上
陸、水、火、炊、取、家、未、出、張、上、陸、等
右、出、後、者、打、合、上、取、計、給、不、都、合、事
右、右、系、組、福、息、金、吾、富、所、事、即、中、事

九月廿四日 晴

一 本日日曜、付記事、事

九月廿五日 曇

一 今日上浦續、二色袋、より、同所出、鼻、為、測量、士官、兩人
孫然、舟、着、取、締、栗、鴻、彦、八、郎、系、組、孫、越、事

一 今朝、ゴニボート、レフエン、船、大、表、海岸、浦上、沖、合、途
暗礁、淺深、等、測量、夕刻、歸、港、事

一 明朝、ゴニボート、レフエン、船、一、同、所、港、出、帆、積、事
是、迄、彼、方、買、入、品、引、締、勘、定、事、不、殘、取、纏、大、嶋
并、枓、杭、村、役、人、共、に、夫、相、濟、事

九月廿六日 晴

一 今朝六時過ゴニボート、レフェン船一同大島港抜锚同
 玉田邊邊ゴニボート、ドーフ船相尋を為メ出帆し、
 幸以市寄沖合を至り逆風其上汐流を逆ひ何分航
 渡難を成次第、大島東の方を押流され、
 午後八時半時次大島港に、
 幸以舟碇泊し、

一 ドーフ船相尋を為メ、
 幸以船將中、
 卯方即ち通達致す事

九月廿七日 雨

一 今朝六時過レフェン船ドーフ船探索を為メ、
 幸以港出帆す事

海舟書屋

一 今朝風強、
 幸以出帆可申、
 幸以ゴニボート式艘より木
 柴追々缺乏可申、
 幸以船積入、
 幸以中運送方、
 幸以百俵積入、
 幸以取計す事

九月廿八日 晴

一 今日出帆、
 幸以積有、
 幸以風順、
 幸以付碇泊す事
 一 ドーフ船探索を為メ、
 幸以昨日差を、
 幸以レフェン船と朝當、
 幸以日比、
 幸以同所引返、
 幸以今八時時次、
 幸以港に、
 幸以碇泊す事

一 去十九日紀州浦へ再渡為測量差違見下一ノ秋
夕七時頃當港に去る船あり

一 右ト一ノ船去十九日大島港出帆其日紀州島高郡
田邊内細野浦に碇泊翌廿日同所測量同廿一日古浦
續切目寄り投錨翌廿二日蘭浦に碇越翌廿三日
同所港下津浦に入津同廿五日田倉崎迄碇越
去り素病一難賀暑迄に投錨翌廿六日毛見
等子の大崎湾測量其夜清水浦に一泊同廿七日
田邊浦續南部浦に投錨翌廿八日同所出帆日比岸
手前よりレ工ニ船出逢直に當港に去る船あり

右浦へ上陸測量等々一ノ一ノ島あり一ノ島あり
之役人並合々各々場所等測量等々不都合
等々相違見たり各々相違見たり

一 今ヨリゴニボート載艘共立舟あり付 孫明朝出帆為り
中之を通り四國海上航渡に積りて去る船あり
四國并日向大隅薩摩肥前等何れも大諸候より
人心折令字も不宣其上以行程中より摸探するに時候も
不定雨天勝り多薩州佐田岬等九州等一ノ難所
之趣も相討自然時化豫知等々何れも漂流
可申哉難計未是深怨念あり一ノ有右等程能相

但一可和集ハ瀬戸内ハ長崎表ハ航廻之方可然古
中論之要松將ヲ於ても彼方十一月ハ支那香港ハ可
越積中ノ右期限も和延有之付以上時位後多ク自然時
右延容易ニ表海航海も相集り其ノ上右旅人ハ不
合ノ國多ク測量等々多ク差支勝之可ク之付今處ニ相
止メ瀬戸内航海ノ積リ流決心明ク一回出帆長崎表ハ
一相也先路ノ事々々下ノ國五島邊一付測量等可ク保
之可有之付船中ノ事々々付是之付之趣ニ持給智之付
思ハ委細序用状ノ相認即ハ江戸表ハ事々々事

但目付方序用状一回和延島材添觸之々々大

海舟書屋

島浦役人ハ和延ノ事

九月廿九日 晴

一 今朝六時頃ゴニホート一回大島港出帆瀬戸内ハ向ケ
開帆然之重同國湯ノ晴沖合ニ至リ路程ト一ノ船和
田浦并日比浦ハ大寄之迄測量仕殘一ノ場所
目之々々趣々右時難淺深測量々々者メ同所よりト一
ノ船美造幸船并レフエニ船去日比岬迄相疑々夜
同新沖合より投錨一泊之事

九月晦日 晴

一 今朝六時頃日比沖合出帆同島島浦ニ湯淺田

村下津良遠浦に像淺深暗礁測量之為レフ工
 二船差遣本船右ゴニボート武艘持合之為同本日
 高郡大寄港に今夕七時沃入津碇泊之事
 一ゴニボート武艘共和田浦の大崎迄之浦に測量船
 夕六時過大崎港に入津碇泊之事
 一明朔日曜日付當港に滞船明後二日出帆積
 右迄ゴニボート武艘之用意之於先尚本炭五六百
 俵買入意旨船符中至之付大寄村役人中中談
 右本炭賣渡方取計之事

十月朔日 晴

海舟書屋

一 本日曜日付ゴニボート一同當港に滞船之事
 一 紀伊殿地方役人吉田源右衛門中寫主右衛門船中
 二船今般測量船當港に入津に付諸事用帛之為メ出
 後船中付之付不取敢出張之者中一ツル
 一 登後大寄浦并下津浦に船符之外為測量上陸
 二付者取締並承濟之即 粟島島長に即立石得
 十之節 夫に附添に然之事
 一 船中に為食料鶏其外買入之為旨船符中至之付
 村役人中中付夫に賣渡方取計之事

十月二日 曇

一 今朝六時過ゴニボート出帆大寄港出帆ドーフ船を
 阿蘇鳴門迄より淡州内海測量積レフエシ船を
 淡州六島迄も同國外海岸測量瀬口より本船に
 落合を積りて出帆之事

但本文ドーフ船鳴門迄測量に付て同所の航廻
 難所を廻るも、（？）舟土人漁夫等と抱子取等
 度款をレフエシ船系組齋藤卯吉郎ドーフ船に
 多分積りて舟を船將中野吉吉今朝同人儀
 ドーフ船に乘替出帆之事

一 今朝四時市松大崎港發帆淡州瀬戸内に向付相

船を空登九時過淡州津名郡由良港入口入
 津破泊之事

一 船將并士官を人中良港内浅深測量として船越舟
 着取締甚末漏之即栗崎着舟附添員越之事
 一 今夕刻レフエシ船由良港に着碇之船淡州大島に航渡
 夫より同國外海通り浦々測量出帆に相出りて越丸
 上陸等ハ不致越右系組福岡全吾中野也

十月三日 晴

一 本船并レフエシ船一同今朝六時前淡州中良港出
 帆播磨灘に向付相發りて、（？）播州明石浦に至

り以流日逆の且風順毛不官有二月明石浦に
フエレ船一同碇泊之事

一 松平兵部大輔家来船より既澤田均平松中
孫越義と測量取之儀と付序達之趣も有之
旨書掛り各部大輔より旨申付之同用各
不取敢出張之趣申付

一 コンボート木炭欠乏之旨今月中於六百俵買入
旨松將中より二月明石出役澤田均平に中談木
炭六百俵船積買入方取計之事

一 本日正午測量可申家沖合に能右測量出先

當所を撰物海并播州海出鼻二月夜明石
浦新濱海岸に一寸上陸北極南晨二星測
量経緯度相見方有船將中より二月夜中儀
もも人等皆有之旨所より志趣念有右新
濱出寄の上陸を取締意未漏之即栗高彦
八郎附添孫越四時沃之方茶歸之始路之事

十月四日 曇 兼雨

一 今朝五時沃市船并レフエレ船一同播州明石浦出帆
ト一ノ松探索之為阿比崎門に針路方位を右相旋
る事淡舟松彦浦沖合より右ト一ノ船に到達未ト一同

同所費帳播磨灘航後夕七半時以讃州屬崎小豆
島大竹左馬太即臣代官所坂手村浦にゴニホ
一ト一回入津碇泊事

一夜中右小豆崎坂手村役人共着用以船中に出

十月五日 雨

一 今朝六時迄本船并ゴニホト一同小豆島浦出帆讃波
備中へ諸島歴航夕七時以讃州三世郡屬鴻粟
島内長濱浦にゴニホト一回投錨泊事

一 ゴニホト、レフェン船木炭追々運切三有向島へ向
買入る船中へ之れに付粟島内片濱村役人中

海舟書屋

諸島に寄る所を炭拂屋へ廻り流四十俵計を調
査し付右積入賣渡方取計事

十月六日 曇

一 今朝出帆後夕一同投錨小豆島處昨夜は暴風
雨時化模様逆風多航路難在船中二付風極右定
其迄尚粟島浦へ投錨滞事

一 粟崎浦に右炭積を艘入津へ廻浦役人共中崎小豆
島へ向三百俵ゴニホトへ買入る船中へ之れに付
浦役人并右炭積方ゴニホトへ廻中談置事

十月七日 晴

一 今朝五时沃讚物粟島浦ゴニホー卜一同出帆備
後地へ渡海夕七时迄同本沼隈郡阿部藩次郎
領海鞆津へ入津碇泊之事

一 鞆津在任阿部藩次郎家来高海濱於右場の平川
市船舟人船中へ越え船量形儀申達之事
ヨリ之ヨリ付諸事用舟相成之程藩次郎の船中付
多趣申付申問當港并是等測量之儀申支之場不
等ヨリ之船一應相尋之儀申支之程越え舟舟人中以

十月八日 晴

海舟書屋

一 幸の出帆之日曜の付一日滞船之事

一 昼後船將昇士等當港水深測量是港既出之
子経緯度測量有之付為船編甚以未滿一粟
崎彦八郎立石得十郎来附添務越之事

一 舟着卯辰即去二日ト一船被方都合之為是船處
右船用米相満之レフエニ船長立之由之事

十月九日 曇

一 今朝五时沃本船并レフエニ船鞆津登帆俵後伊録
之島へ歴航夕六时頃藝物豊田郡属崎大島
大崎上島に投錨一泊之事

一 十一日 船之今朝 鞠津 最寄 淺深 暗礁 測量 右
相浦 次 莫 出帆 上 関 途 多 市 船 之 落 合 積 多 相 跡 小 事

十月十日 曇

一 今朝 六 半 時 頃 大 寄 上 之 船 懸 帆 然 之 後 正 合 後 之 相 本 次
莫 二 風 止 帆 之 難 厥 之 有 仔 錄 地 方 風 早 郡 淺 海 亦 浦
沖 合 之 投 錨 風 待 之 一 之 夕 刻 三 十 一 日 同 不
之 際 合 未 之 打 合 相 浦 船 入 風 潮 順 流 相 順 之 旨 五 時
頃 同 所 拔 錨 終 夜 防 州 海 之 向 け 相 跡 之 事
一 三 十 一 日 武 藏 志 防 州 伊 豫 志 海 岸 之 引 分 下 関 通
航 同 所 之 落 合 之 積 多 中 合 未 之 出 帆 之 事

海舟書屋

十月十日 晴

一 今朝 之 相 本 市 船 防 上 関 沖 合 之 難 有 之 處 尚 風
順 宜 有 之 之 有 周 防 灘 航 渡 夕 七 時 過 長 物 豐 浦
郡 志 間 関 之 著 船 投 錨 之 事

一 著 碇 直 之 毛 利 左 之 亮 泉 未 志 之 関 之 書 中 村 總
之 助 某 同 所 所 役 人 之 有 船 中 之 務 出 船 之 測 量 形 之 儀
之 付 出 簡 達 之 趣 相 心 得 用 舟 之 為 出 張 之 趣 中 之 儀
一 明日 快 晴 之 旨 下 関 并 門 司 浦 之 途 測 量 之 儀 船 物
中 之 事 之 付 未 之 役 人 共 呼 出 之 著 舟 又 之 之 相 尊
之 事 何 事 之 著 舟 又 之 之 事 中 之 儀 之 事

一 船中缺乏品等買入方中五五二付町致人未十港置

十月十二日 晴

一 志留岡桑門司浦系船將并古官老人上陸経緯度
測量有之付若糸緯度亦濟之即栗島高八
郎古石湯十郎未之附流居越之事

一 昨夕中食料欠之品等町役人持糸三付未
賣渡方取針之事

一 コンボート船彼用防灘赤海岸測量等相漏夕七
時過一同赤回岡着船之付亦炭等換入直長
物表に航廻之積水合之事

海舟書屋

一 本船今夕刻未回岡抜錨航前海に向き渡航
終夜去界灘航海之事

十月十三日 雨

一 今朝三船於肥前海航渡同至加唐島山川崎に至
り逆風雨天追々此化擲擲相成り有同岡松浦
郡加部島内崎子港に入津投錨之事

一 コンボート船彼共昨夜下、岡邊帆今夕刻崎子
港に一同入津碇泊之事

一 當地唐津領三付夜々入山等系依港を使者津田
重平本船に於て測量船出港入津に付薪水食料

此外共諸子用每周旋可也皆依流而下中付能
下付不取敢之徒出之趣演說孰之由港并加部之
江為測量上陸有之在子由差支之為相尋之
至御差支之之中以凡

十月十四日 晴

- 一 今朝如船泊江天慶為測量船將兵士官三人上陸付
為取掃粟之由子八郎之在湯子即附添之船也
- 一 ドーハ船に木炭缺乏之有買入之有者中在之有材役人
共之中談賣渡方取計之事

一 今日出帆之積之之之昨夜分逆風強出帆難

海舟書屋

右家之付於滯之形之事

- 一 登後崎子港内船將測量者之有者有為取掃粟
浦之即之有即附添之船也

十月十五日 晴

- 一 今朝六時過崎子港ゴニボート一同出帆同島之并
平戸瀬戸内通航夫の相撲灘に相渡り夜五時過
一同之滯長寄港に入津碇泊し自船將に尚又操
子柄相尋之由之通測量之儀之候方
アドミラル、ホープが命令之趣も之今般之出帆迄之
相歩右測量船一同支那香港に向付直之帰航之趣

中立且是迄亦々々間系組役々一同の厚世を確る事
航出中別々諸事都合の望み測量等々亦亦政府
の右扱々は厚意々々後々番細を府三ニストル、アールコ
ツク、中々是回人々政府に其禮可申上積り、皆都合
次第上陸可然中聞系組一同の夫々挨拶々々後

十月十六日 晴

一 昨日船將々引合々通商港迄々々亦亦用漸々成ル、有々々々系組
後々一同上陸長崎亦亦新々在届夫々旅宿在在右所用
備々後々番細所用状々若認江戶表々差々々々事

亦々後英國測量船々系組申日々取扱向書書面々通商港以上

海舟書屋

和親條約の束々々及々沿海港湾の位置礁沙
の危険を豫め講究々々々々々々一日も緩々々々々
さ々々急務也さ々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
此様を失せ下回々々事々請ふ所あるハ其職掌
上當然の事々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
知々々亦亦々々々々々々我々有司々々只管我々邦々規
寄々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
迷謬恐怖々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
へて航海の業々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

の頑陋乖離何を以ての甚きや願ふは邦人の
 久しく鎖國を狂れ宇宙の形勢を昔時より
 ありと察せしめて後日外人を嫌忌し其物議
 の沸騰を慮りてさうすもあはれ其政府の
 去確として一定の國是を認め毅然不動これ
 を決行せし何事か不成の強あらん哉然るも
 當局者先づ特ひて一定の方向なく迷想恐怖
 してこれに前人の勸諭を以て何人の之を是
 らしめ又識者もさうせん譬は小兒の賣薬を恐
 らしむ通常の事ありせば其親若し其父長せし
 ば

又これをも意とせしめて談笑自若平々日々
 うきわの小兒自然これに習ひて漸く化せし
 至らんさうを父兄もつ恐懼戦慄して小兒の
 論を注漢を止めんと是を決して行われり
 又況や一度外人の爲に開港を許さし
 海灣海路の探究を固より申すありて
 許各の論の如きと開港決議の目ありて
 於てをや

閑國起原卷十五

5

海舟書屋

10417

